

国際学会報告

第3回韓国・中国・日本合同シンポジウム：草地農業と家畜生産

-The 3rd Korea-China-Japan Joint Symposium on Grassland Agriculture and Livestock Production-

花田 正明

帯広畜産大学

2009年8月10日から14日にかけて韓国ソウルの建国大学において韓国草地学会主催による第3回韓国・中国・日本合同シンポジウム：草地農業と家畜生産（日中韓合同シンポジウム）が開催された。この合同シンポジウムは、日本、韓国、中国のそれぞれの草地学会が持ち回りで開催しており、第一回は2004年に広島大学で、第二回は2006年に中国・蘭州大学で開催されてきた。今回の日中韓合同シンポジウムのテーマは、「New Paradigm for Diversity Forage Production in East Asian Region」であり、自由貿易協定、環境保全、異常気象、飼料・食料不足、食の安全など東アジア地域の草地農業をとりまく様々な問題・課題について情報交換し、よりよい解決策について論議することがシンポジウム全体の目的であった。

今回の日中韓合同シンポジウムは口頭発表とポスター発表から構成されており、口頭発表は、① Production of good quality forage using cultivated farm land, ② New approach compatible for forage and environment conservation, ③ The use of reclaimed land for forage production, ④ Efficient use of grassland for livestockの4つのサブテーマからなり、日本、中国、韓国他に米国とモンゴルからの招待者による講演が行われた。サブテーマ①では、草地畜産研究所の菅野勉氏による「Innovative technology for forage production using cultivated farm land in Japan」の発表の他に、中国からは耕作地帯における草地農業システムの発展方向について、韓国からはホールクロップ作物用の大麦、ライ麦、燕麦、ライ小麦の改良に関する発表があった。サブテーマ②では北海道農業研究センターの小路敦氏による「Conservation and restoration of pluvial temperate semi-natural grassland in East Asia」の発表の他に、韓国からは遺伝子操作による飼料作物ならびにバイオエネルギー作物の改良、中国から砂地土壌における草地農業の生態系保全について、さらに米国からスイッチグ

ラスによるエネルギー生産についての発表があった。サブテーマ③では、中央農業研究センターの千田雅之氏による「Development of grazing on paddy and its significance for land utilization under population decrease」の発表の他に、韓国からは韓国で改良されたイタリアンライグラスの生育特性と種子生産、中国からは中国国内のアルファルファの遺伝子型の分類、さらにモンゴルからモンゴルの過放牧された草原の環境評価に関する発表があった。サブテーマ④では岐阜大学の八代田真人氏による「Strategy for the nutritional management of cattle grazing in native grasslands in Japan」の発表の他に、中国からEcosystem serviceという概念を取り入れたステップ草原の評価、韓国からはロールベールサイレージ用のサンプル採取器具の開発に関する話題提供があった。

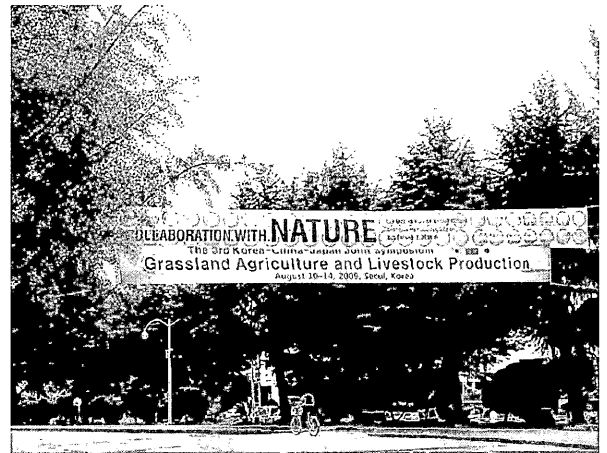
ポスター発表は、① Forage Production and Quality Evaluation, ② Crop Management and Cropping System, ③ Plant Nutrition, Ecology and Physiology, ④ Manure and Slurry Utilization, ⑤ Genetic, Molecular Biology, ⑥ Plant Breeding and Seed Production, ⑦ Silage and Hay Management, ⑧ Grazing Management, ⑨ Animal Nutrition and Livestock Productionの9分野に分かれて行われた。粗飼料生産・品質評価分野（①）では日本、中国、韓国それぞれ1、7、15題、合計23題の発表があり、中国からの発表は青海省の高地寒帯草原から熱帯牧草まで幅広い草地を研究対象としており、東アジアの植生の多様性が再認識された。一方、韓国からの発表はオオムギやイタリアンライグラスを原料としたサイレージ生産に関する報告が多かった。栽培管理・システム分野（②）では日本、中国、韓国それぞれ4、5、3題、合計15題の発表があり、ライムギ、オオムギ、イタリアンライグラスなど一年生の飼料作物の生産に関する報告が多くみられた。また、栽培方法と環境保全との関連についての報告もあった。植物栄養・生態・生理分野（③）では日本、中国、韓国それぞれ1、11、2題、合計14題の発表があった。糞尿利用分野（④）

では中国からの発表は無く、日本と韓国からそれぞれ1、6題、合計7題の発表があり、韓国からの発表の多くは堆肥やスラリーの施用がイタリアンライグラス、ソルガム、飼料イネなど飼料作物の生産性に及ぼす影響を検討したものであった。遺伝・分子生物分野(⑤)では日本からの発表はなく、中国、韓国それぞれ9、13題、合計22題の発表があった。植物育種・種子生産分野(⑥)でも日本からの発表はなく、発表は中国、韓国からそれぞれ4、2題の合計6題であった。サイレージ・乾草調製分野(⑦)では日本、中国、韓国それぞれ2、7、3題、合計12題の発表があり、サイレージ品質に対する添加物の効果を査定する報告が半分を占めていた。また、アルファルファとトウモロコシサイレージを対象とした報告が多く、粗飼料基盤としてでもアルファルファとトウモロコシに対する関心が高いことが伺われた。放牧管理分野(⑧)では日本、中国、韓国それぞれ2、4、7題、合計13題の発表があり、中国・内蒙古における草原管理に関する報告が4題あった。発表の多くは寒地型草地での報告であったが、ネピアグラス、シバ、バミューダグラスなど暖地型草地における放牧管理に関する報告も4題あった。家畜栄養・生産分野(⑨)では日本、中国、韓国それぞれ1、5、7題、合計13題の発表があり、肉牛、乳牛、ヤギなどを対象とした飼料価値査定に関する研究や共役脂肪酸に関する報告があった。また、Yellow GoatやHanwooなど在来家畜生産に関する報告もあった。

このように今回の日中韓合同シンポジウムでは様々

な草地、飼料資源、家畜が研究対象として取り上げられ東アジアにおける草地農業の多様性を感じさせられたとともに、同時に多くの共通した問題・課題を抱えていることも再認識させられた。今回は日本からの参加者が少なく韓国・中国の勢いに押された形(特に懇親会では)ではあったが、3回目の開催とあって各国間の交流のいっそうの深まりが感じられた。今後、この日中韓合同シンポジウムが、東アジアの草地農業が抱える課題に対し各国の研究者が連携して取り組むためのプラットフォームの役割を担えるよう発展していくことが期待される。

次回の開催は、2010年、日本での開催です。北海道畜産学会の会員の皆様の第4回日中韓合同シンポジウムへの参加を期待しています。



大会会場の建国大学構内